

子規の句「花木槿 家ある限り 機の音」



「花木槿 家ある限り 機の音」とい
う正岡子規の有名な句がある。かつて伊
予緋のメッカとして勢いのあつた伊予郡
垣生村（現松山市西垣生町）今出で、明
治28年に詠まれたのだった。説明板によ
れば、今出
の村上霽月
邸を10月7
日に人力車
で訪れ、そ
の日の散策
集に「ここ
は今出鹿摺
とて鹿摺を
織り出す処
也」とあり、
「汐風や

“MY TOWN” うおっちんで

歩 & 目 足 キ ラ テ ス

Vol.66

伊予緋の創始と 縞売りの女たち

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー

「花木槿 家ある限り 機の音」とい
う正岡子規の有名な句がある。かつて伊
予緋のメッカとして勢いのあつた伊予郡
垣生村（現松山市西垣生町）今出で、明
治28年に詠まれたのだった。説明板によ
れば、今出
の村上霽月
邸を10月7
日に人力車
で訪れ、そ
の日の散策
集に「ここ
は今出鹿摺
とて鹿摺を
織り出す処
也」とあり、
「汐風や

瘦せて花無き 木槿垣」の句と一緒に記
録されているらしい。日清戦争に従軍記
者として赴くが、帰途再啗血して帰郷療
養中かと思われる時期である。この句碑
は、機の音がしなくなつた今出ではな
く、昭和53年に伊予緋会館の前に建てら
れている。



伊予緋会館にある鍵谷力ナの胸像

鍵谷力ナ、江戸期の女性で
ある。天明二（1782）年
生まれ、元治元（1864）
年に没するまで、当地にお
いて、緋織りの改良に努め、
享和年間（1801〜04）
に今出緋を考案したとされ
る。そのエピソードが面白
い。文献によれば、金刀比羅参宮の際に
同船した九州人が久留米緋を着ていたの
を見て、あるいは藁葺き屋根の葺き替え
の時に押し竹を縛った跡の斑紋からピン
トを得たと。常日頃からそうした事柄に
関心を持っていた証としての着想でもあ
り、カナの人となりイメージされる。

その後、文化年間（1804〜18）頃
に松山城下の松前町に伊予緋の織店を開
業した菊屋新助（現今治市波方町出身）



木子七郎の設計による鍵谷力ナ頌功堂



唯一、今出地区に残る伊予絨生産施設としての旧西村中央

が、能率の悪い地機を改良し縞織りに便利な高機に改造、縞の量産化に成功する。そうした相乗効果もあって縞織りの絨文化が市井に定着していった。

やがて明治維新の近代化により、同20年代以降は生産が急増し、丁度その頃に子規が今出を訪れたことになる。さぞや周囲の機音が耳についたはずである。明治37年には、久留米絨、備後絨を押さえ、ついに愛媛県が全国生産第一位となり、シェア4分の1を誇るほどにな

る。大正12年にはそのピークを迎え、北海道にまでその名が知られるようになってい

るのだ。背景にはまたまた女性の力が大きくその支えとなっていた。

松山市の向かい側伊予灘に浮かぶ忽那諸島がその現場である。特に睦月島、ここは知る人ぞ知る縞売り行商の島として知られる。近くの野忽那島も同様に栄えるが、不思議なことに野忽那は男たちが行商に、睦月は女たちが島を出て販路拡大をしていったのである。明治20年代頃からそれは本格化して、縞木綿の反物や縞、裏地など各家々の持ち船が50杯以上あり、1杯に500〜1000反を積み込み、当初は中国地方沿岸域に販路を求め、次第に西日本全体へ。全盛期の大正から昭和初期にかけては、北陸、東北、北海道、対馬、奄美諸島、満州にまで及



森本家の長屋門

ぶ。そうした経済背景の凄味が伺えるのが、睦月の海岸に建ち並ぶ長屋門群の家並みである。今の時代環境では、次第に老朽化してゆく様はやむなきことではあるが、遠く海路を頼りに遠隔地まで出かけ、留守を預かる男たちを背にたくましく地域経済を支え続けた無名で無数の女たちの物語を想う。言わば眼前の家並みは、そのバイタリテイによつて築かれた光景なのだ。



縞行商の長屋門群の家並み